

イザヤ書5章1-7節

フィリピの信徒へ手紙3章13-21節

マタイによる福音書21章33-43節

すっかり秋らしくなりました。風通しの良い教会は、半袖では少し肌寒い感じ
です。昨日は、聖アンデレ主教座聖堂で合同堅信式がありました。6つの教会から
10人の方が主教様から堅信を受けられました。わたしたちの教会からも一名
の方が、堅信を受けられました。

今年もあと四分の一となりましたが、今月はバザーもあります。クリスマスに
向けて、教会の活動をより盛んにすることができればと思っています。

さて、本日の旧約日課は、イザヤ書です。冒頭に「私は歌おう、私の愛する者
のために、ぶどう畑の愛の歌を。愛する者は肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。」

（イザヤ5:1）とあります。イスラエルがぶどう畑にたとえられています。ぶ
どうは紀元前から、この地域では一般的な果物であったことが分かります。冒頭
のこの描写は、美しい歌に響きますが、最後の7節が、なぜぶどう畑をイスラエ
ルにたとえたのか明示されます。「万軍の主のぶどう畑とは、イスラエルの家の
こと。ユダの人こそ、主が喜んで植えたもの。主は公正を待ち望んだのにそこ
には、流血。正義を待ち望んだのにそこには、叫び」（イザヤ5:7）。このたと
えは、主の御心に背いて、正義を行わなくなったイスラエルに対する批判なの
です。

聖書協会共同訳になって、新共同訳にあった言葉の遊びのような部分は、注へ
と移行しました。いまもそこを見ればミシュパト（公正）、ミスパハ（流血）と
音の響きが似ていても、内容が全く違う批判が、現代にも響いています。似てい
るが内容は全く異なる。単なる言葉遊びを超えて、人間の認識の愚かさを指摘し
ているとも言えます。

本日の福音書の物語にも、先週に続き、ぶどう畑（園）が出てきます。先週と
同じように主題となっているのは、そこで働く人々です。つまり、祭司長や民の
長老たちです。先週の箇所では、彼らはたとえを通して、イエス様から批判され
ていましたが、ここでも批判されています。聖書日課にはありませんが、続く21
章45、46節で「祭司長たちとファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イ
エスが自分たちのことを言っておられると気づき、イエスを捕らえようとしたが、
群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていたからである」とあり、その
ことが明確にされています。

本日の福音書の箇所は、このイエス様の「ぶどう園のたとえ」の物語と、イエ
ス様と祭司長や民の長老たちとのやりとりの物語という、二つの部分から構成さ
れています。最終的にたとえを聞いた敵対者の反応という形で終わっており、そ
こに結論があるといえますが、ぶどう園のたとえ物語自体を考えることも大切で
す。

このたとえは、分かりやすいお話です。「ある家の主人」がぶどう園を作り、
農夫たちに貸したが、農夫たちは、収穫を渡さずに、悪を行ったということです。
主人は、僕たちを送りますが、ひどい目にあわされ、最後に息子を送ったが、殺

され、ぶどう園の外に放り出されます。大変ひどいお話しです。

この「ぶどう園のたとえ」が、非常に分かりやすい理由は、たとえの中で登場人物たちが、きわめて単純に描かれているからです。農夫たちは、どう考えても、弁護できないような悪い人々です。そして、ぶどうの持ち主は、徹底して慈愛に満ちている人です。それゆえ、「たとえ物語」を聞いた祭司長や民の長老たちも、イエス様が「さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」(マタイ 21:40)と尋ねると、「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸し出すに違いありません」(マタイ 21:41)と答えてしまうほどであるからです。つまりイエスの敵対者たちでも農夫たちを批判する内容であるということです。

マタイ福音書におけるこのたとえの物語(21:33-46)は、敵対者たちに対する批判ということが結論ですが、イエス様のこの「ぶどう園のたとえ」自体が持つ、使信その響きの強さを考えたとき、それには、一つの認識が前提となっていることがわかります。つまり、ぶどう園の主人の愛の深さに対する認識です。しかし、同時に次の疑問も提示します。そんな優しい、愛に満ちたぶどう園の主人が、現実にいるだろうかという問いです。現実的に、そのような人はいるはずもないでしょう。なんだ、架空の話か、それで終わってしまえばそれで終わりですが、たとえを聞いて農夫たちを批判したイエス様の敵対者たちも、そんな愛に満ちた主人がいたらすばらしい、そのような方の思いを裏切ってはいけない、そう思ったとように描かれています。そして、直接的であれ、間接的であれ、その主人の姿に主なる神様が暗示されていると感じたでしょう。

主なる神様が、この地上の人間の誰でも比較にならないほど慈愛に満ちている方であること、このことは、全く新しいことではありません。先に見た、イザヤ書にも見られる通り、『聖書(旧、続、新)』が一貫して語っていることです。だからこそ、マタイ福音書を最初に読んで人々も、ぶどう園の優しい主人など、現実には存在にはいないが、いたとすればそれは、主なる神様をおいて他にはいないと認識したと思います。そして、そのような主なる神様を、どのような形で、どこで示すことができるのか、そのことを懸命に考えたと思います。もちろん、その場所は、少なくとも最初にそうであるのは教会にほかなりません。マタイ福音書を最初に読んだ教会の人々は、主なる神様の愛を示すために、言い換えれば、神の国にふさわしい実を結ぶために努力し続けていたと思います。そして、その歩みを続けながら、この世界が主の目に正しい世界に変わっていく未来を、見ていたのだと思います。

その歩みは、時間と空間を超えて、どの教会においても同じです。教会の歩みはすべて、主なる神様の存在を示すため、その愛を示すためにあります。そこがほかの団体と教会の違いです。それゆえに、活動の多い教会は、その役割もそして責任も多いのです。わたしたちの東京聖三一教会は、コロナ禍が始まるまでは、多くの活動がありました。これからも、それらの活動を、今までと同じようにあるいは新しい形で具体化していきたいと思います。その歩みには模範的な形も完成ありませんが、これからもより豊かに愛を示すことができるように努めたいと思います。